

第一章…悪のクリスマスと、湯煙の向こう側

完璧だ。

そう、今日の私はいつにも増して完璧なはずだ。

ゲヘナの自治区から遠く離れた、山間にひっそりと佇む高級温泉旅館。

隠れ家的な雰囲気を漂わせるこの場所は、まさに裏社会のドンが鋭気を養うに相応しいロケーションと言えるだろう。

予約の手配？ 当然、抜かりはない。便利屋のボスとして、これくらいの段取りは朝飯前……と言いたいところだけど、実際はハルカが徹夜でリサーチしてくれた中から、私が震える指で一番高いプランをポチっただけなんだけど。いや、その過程はどうでもいい。

重要なのは、今。

この私が、先生と二人きりで、ここにいるという事実。

「……ふふっ。どう？ 先生。なかなか悪くない場所でしょう？」



私は車の助手席から降り立つと、わざとらしくコートの裾を翻した。

夕闇が迫る温泉街の風は冷たいけれど、私の頬は別の理由で熱を帯びている気がする。隣に立つ先生を見上げると、彼は柔らかな表情で古風な旅館の門構えを見上げていた。

「すごいな、アル。こんな立派な旅館、予約取るの大変だったんじゃない？」

その言葉を待っていた！

私はサングラスの位置を指先でクイツと直し（ズレてないけど）、ニヒルな笑みを浮かべてみせる。

「これくらい、私にかかれれば造作もないことよ。ハードボイルドなアウトローには、休息の質も重要だからね。……さあ、行きましようか」

内心では「一泊の値段、事務所の家賃何ヶ月分!？」と叫び出しそうになるのを必死に堪え、私は先生の手を取ることもできず、一歩先を歩き出した。

エスコートされるのを待つなんて、か弱いヒロインのすること。

私は悪の社長。私が先生を導くのよ。……まあ、予約確認のメールを握りしめた手が汗で湿っていないか、気が気じゃないんだけど。

◇

通された部屋は「離れ」だった。

仲居さんの案内で渡り廊下を進み、重厚な扉を開けた瞬間、漂ってきたのは草の香りと、微かな硫黄の匂い。

広い。無駄に広い。

十畳の本間に、広縁、さらには露天風呂付きのテラスまである。

「ごゆっくりどうぞ」

仲居さんが去った後の静寂。

それが、急に私の心臓のBPMを跳ね上がらせた。

やばい。二人きりだ。本当に二人きりになってしまった。



ムツキのからかいも、ハルカの過剰な心配も、カヨコの呆れた視線もない。
ここにあるのは、高級すぎる空間と、先生と、私だけ。

「……アル？」

名前を呼ばれて、ビクッと肩が跳ねる。

振り返ると、先生が不思議そうにこちらを見ていた。いけない、威厳、威厳を見せないと！

「な、なにかしら！ 私はただ、部屋のセキュリティチェックをしていただけよ！ 盗聴器とか、スナイパーの射線とか、そういうの！」

「はは、流石だね社長。でも今日は仕事抜きでしょ？ もっとリラックスしていいんだよ」

先生が近づいてくる。

その自然な距離感に、私の思考回路はショート寸前だ。

彼は私の肩にかかっていた重たいコートを、そっと背後から脱がせてくれた。

「あ……」

コートの下は、薄手のニットワンピース一枚。

室内暖房が効いているとはいえ、急に無防備になった背中に先生の視線を感じて、背筋がゾクゾクする。

先生の手が、私の肩から二の腕を優しく撫で下ろした。

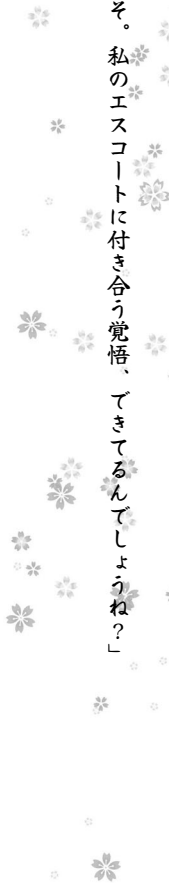
「疲れた顔してる。……最近、無理してたんじゃない？」

「そ、そんなことないわよ……。私はいつだって余裕だし……」

嘘だ。本当は、先生に会いたくて、寝めてほしくて、今日のために仕事を詰め込んで終わらせてきた。

その気遣いが嬉しくて、でも素直になれなくて、私は唇を尖らせる。

「……先生こそ。私のエスコートに付き合う覚悟、できてるんでしょうね？」



「もちろん。今日はアルの言う通りにするよ」

その「言う通りにする」という言葉の響きが、妙に艶っぽくて。

私はカッと熱くなった顔を隠すように、部屋に用意されていた浴衣のセットを指差した。

「と、とりあえず着替えましょう！ 温泉に来ていつまでも洋服なんて、風情がないわ！」

◇

洗面所の鏡の前で、私は一人、絶望的な戦いを繰り広げていた。

敵の名は、旅館の浴衣。

もって正確に言うなら、私のサイズと浴衣の相性の悪さ、だ。

「……くっ、なんて……帯が、回らないのよ……！」

一般的な女性サイズのはずなのに、胸元がどうしてもはだけてしまう。



すっかり合わせようとする。帯の位置がおかしくなるし、帯を優先すると今度は胸が苦しい。

私の胸が、規格外に大きいことは自覚している。普段のスーツやコートなら隠せる（隠されてないと言われることもあるけど）けれど、こういう和装は誤魔化しが効かない。豊満すぎる双丘が、薄い布地を内側から強引に押し広げようとしてくるのだ。

「うう……こんなだらしなない格好、先生に見せられない……」

悪のカリスマが、浴衣ごときに敗北するなんて、帯をギョツと締め直そうとしたその時、

「アル？ 手伝おうか？」

薄い引き戸の向こうから、先生の声。

「ひゃっ!? だ、大丈夫よ! 一人で着れるわ! これくらい、赤子の手をひねるより簡

単……きゃあっ!?!」

焦って振り返った拍子に、足元の籠に躓いた。

ドタン、と派手な音が響く。

ああ、終わった。私のハードボイルド。

次の瞬間、ガラッと戸が開いて、心配そうな顔の先生が飛び込んできた。

「アル! 大丈夫か!?!」

「み、見ないでえええー!?!」

私は床にへたり込んだまま、両手で胸元を押さえた。

……けれど、遅かった。

はだけた浴衣の襟元からは、白く柔らかな谷間がこれでもかど露出している。

乱れた裾からは太ももが覗き、苦戦していた帯は中途半端に私の腰に巻き付いて、まるで拘束具のようだ。



「……あ……うう……」

先生の視線が、私のあられもない姿に釘付けになっているのがわかる。

恥ずかしい。消えてしまいたい。

でも、先生の瞳に宿る色が、単なる心配だけじゃなくて、もっと熱っぽいものを含んでいることに気づいてしまって……。

心臓が、痛いくらいに脈打つ。

「……怪我は、ない？」

先生がしゃがみ込み、私の膝に手を添えた。

その手が熱い。

「な、ない……わ。ただ、その……帯が……」

消え入りそうな声で白状すると、先生は困ったように、でも優しく笑った。



「立って。結んであげる」

「……え」

「ほら」

促されて、おずおずと立ち上がる。

先生の手が、私の腰に回る。

背後から抱きしめられるような体勢。

近い。息がかかる距離だ。

先生の手際よく帯を締めていく感触が、布越しに伝わってくる。

キュツ、と締められるたびに、強調された胸が上下に揺れる。

鏡越しに目が合った。

私の顔は、茹でダコみたいに真っ赤だ。でも、先生は真剣な顔つきで、私の着付けをし
てくれている。



「……先生」

「ん？」

「……その、ありがとう」

素直な言葉が、不意に口をついて出た。

悪ぶっていない、ただの女の子としての言葉。

先生の手が止まる。

彼は結び目を整え終えると、そのまま私の肩に顎を乗せ、耳元で囁いた。

「どういたしました。……それにしてもアル、その浴衣姿、すごく似合ってる」

「っ……!？」

「特に、その……目のやり場に困るくらい、魅力的だよ」

先生の手が、帯の上から、そっとお腹のあたりを撫でる。

その指先が少し上へ、豊かな膨らみの下側をなぞるように動いた瞬間、私の膝から力が抜けた。



「せ、先生……まだ、お風呂にも入ってないのに……」
「そうだね。……でも、アルが可愛すぎるのが悪いんだよ」

耳に口づけが落ちる。

ちゅっ、という濡れた音が、静かな脱衣所に響いた。

カリスマ社長の仮面なんて、もうとっくに剥がれ落ちている。

今ここにいるのは、大好きな先生に触れられて、とろとろに溶かされそうな、ただの「陸八魔アル」だけ。

「……お風呂、一緒に入る？」

先生の悪戯っぽい提案に、私は言葉を失って、ただコクコクと頷くことしかできなかつた。

温泉旅行はまだ始まったばかり。

ベッドルームにたどり着く前に、私の心臓が持つかどうか……それが今、最大の懸案事

項だった。

第二章…湯の花に咲く、甘美な熱情

夜気が肌を刺す岩造りの露天風呂。

湯船から立ち上る白い湯けむりが、月明かりに照らされて幻想的な帳（とばり）を作っている。

「…………ふう。なかなかの風情じゃない」

私はわざとらしく腕組みをして見せたけれど、その実、心臓は早鐘を打っていた。

バスタオル一枚を体に巻いただけの姿。

隣には、同じように無防備な姿の先生がいる。

視線を合わせられない。

私の視界の端には、湯気越してもはつきりと分かる、先生の引き締まった身体のラインがちらついていた。



「……先に入るわよ」

これ以上ここに立っていたら、緊張で爆発してしまいそうだ。

私は逃げるように湯船へと足を踏み入れた。

ちゃぼん、と音がして、温かいお湯が足首から膝、そして太ももへと這い上がってくる。

「んっ……」

思わず声が漏れた。

お湯の熱さが、冷えた体に心地いい刺激となって染み渡る。

腰まで浸かったところで、私は意を決してバスタオルを外した。

バサリ。

濡れたタオルが岩場に落ちる音と同時に、解放された私の身体が夜気に晒される。
特に、胸元。



重力から解き放たれた二つの豊かな果実は、お湯の浮力を得て、たぶん、と大きく揺れた。

(……見たわね?)

背後で、先生が息を呑む気配がした。

ふふん、当然よ。

私のこの完璧なプロポジション。

普段はスーツで隠しているけれど、この胸は私の密かな自慢なのだ。

悪のカリスマたるもの、知力、財力、そして魅力においても頂点に立たなければならぬ。
この規格外の大きさも、柔らかさも、すべては私が完璧であることの証明。

「……どうしたの？ 早く入ればいいじゃない」

私は湯船の中央まで進み、肩までお湯に浸かりながら振り返った。

水面ギリギリに浮かぶ、白くたわわな双丘。

その先端、熱を帯びて桜色に染まり始めた頂が、湯気の間から挑発するように覗いている

はずだ。

先生がお湯に入ってくる。

湯船の水位がぐっと上がり、お湯が波打って私の胸を揺らした。

隣に来た。近い。

肩が触れ合う距離。

「……ふう。いいお湯だね、アル」

「……ええ。まあ、私のセレクトに間違いはないわ」

強がり言いながら、私は横目で先生の様子を窺う。

先生の視線は、真っ直ぐに私の胸元に向けられていた。

隠そうともしない熱っぽい瞳。

それが嬉しくて、恥ずかしくて、身体の芯がじわじわと熱くなっていく。

「……そんなに、気になる？」



私はわざと、お湯の中で体を少し持ち上げてみせた。
ざばあ、と水音がして、豊かな胸が水面から大きくせり出す。
水滴が白い肌を滑り落ち、先端の膨らみに集まって滴り落ちた。

「……すごいな。改めて見ると、本当に」

先生の感嘆の声。
それが私の自尊心をくすぐる。

「ふふつ、そうでしょう？ これだけの逸品、そうそうお目にかかれるものじゃないわよ。
感謝しなさい」

高飛車な態度を取りながらも、私は期待していた。

先生の手が、伸びてくることを。
だって、こんな至近距離で、こんな無防備な私を前にして、手を出さないなんて嘘でしょ

う？

そして、期待は裏切られなかった。

「……触っても、いいかな？」

先生の声は、少し震えていたように聞こえた。

私は心臓が飛び跳ねるのを必死に抑え込み、努めて冷静を装って頷いた。

「……特別よ。今日だけは、私のすべてを許可してあげる」

その言葉が合図だった。

先生の手がお湯の中を進み、私の身体に触れた。

「ひゃっ……!!」



最初に触れたのは、脇腹のあたり。

そこからゆつくりと、手のひらが上へと滑ってくる。

お湯の温かさとは違う、先生の体温。

少しごつごつした男性の手の感触。

そして、その手が、たわわな果実の下側を捉えた。

「んっ、あ……っ」

重みを支えるように持ち上げられ、私は思わず声を上げた。

大きい。自分の胸ながら、先生の手に収まりきっていないのが分かる。

先生の指が、柔らかい肉に食い込むようにして、ゆつくりと形を確かめていく。

「……柔らかい。それに、熱いね」

「……っ、うるさいわね……黙って、なさいよ……」



憎まれ口を叩く余裕なんて、もうない。

先生の手が動いたたびに、脳髓が痺れるような快感が走る。

下から揉み上げられ、横から寄せられ、形を変えるたびに、お湯の中で胸が波打ち、水音がチャブチャブと響く。

「ふっ、あ……んんっ……!!」

私の口から、我慢できない喘ぎ声が漏れ始めた。

気持ちいい。

誰かにこんな風に触られるのが、こんなにも気持ちいいなんて知らなかった。

しかも相手は大好きな先生だ。

恥ずかしさよりも、もっと触ってほしい、もっと愛でてほしいという欲求が勝っていく。

「……アル、顔、真っ赤だよ」



先生が顔を近づけてくる。

その吐息が頬にかかり、さらに体温が上がる。

「……だ、だって……そんな、変な風に、揉むから……っ」

「変な風？ ただ、アルが可愛すぎて、愛おしいだけだよ」

先生の親指が、不意に、一番敏感な場所に触れた。

「ひあっ！？ ……ん、ああっ！」

ピンと張り詰めていた先端を、指の腹で優しく擦られた瞬間、背筋に電流が走った。
足の指がぎゅっと丸まり、力が抜けて、私は先生の肩にもたれかかった。

「……だめ、そこ……そんなに……っ」



「嫌じゃないでしょ？」

「……いや、じゃ……ない……けど……っ、あ……！」

先生は意地悪だ。

私を感じているのを知っていて、わざとゆっくりと、執拗にそこを攻めてくる。

お湯の熱さと、指先の熱さ、そして内側から湧き上がる熱情で、私はどうにかなくなってしま
いそうだった。

頭がぼーっとして、視界が揺れる。

「……んんっ、はあ、あっ……！」

口を開けて、熱い息を吐き出す。

もう、カリスマ社長の威厳なんてどこにもない。

ただ快感に翻弄される、一人のメスになってしまっていた。



「……先生……」

私は潤んだ瞳で先生を見つめ、無意識のうちに、彼を引き寄せていた。私の豊かな胸の間に、先生の顔を埋めさせるように。

「……ん……？」

先生が少し驚いたように身を固くする。

「……いいから。……もつと、近くに來なさいよ」

私は先生の頭を抱きしめた。

彼の顔が、柔らかい胸の谷間にすっぽりと埋まる。まるで、母親が子をあやすような姿勢。

「……よしよし。……いい子ね」



自分でも驚くほど、甘くて、優しい声が出た。

先生の髪の毛の匂いと、お湯の匂いが混じり合う。

胸に押し付けられた先生の顔の熱さが、直接伝わってくる。

「…………ふふっ。先生、甘えん坊さんなんだから」

私は先生の頭を撫でながら、自分の胸を彼に押し付けた。

この豊かな胸は、先生を癒やすためのものでもあるのだ。

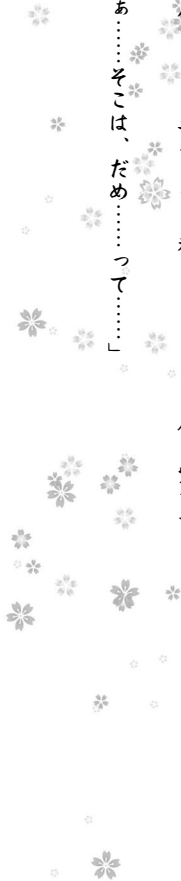
私の自慢のこれで、先生がダメになってしまふ姿を見たい。

そんな嗜虐心にも似た、独占欲が湧き上がってくる。

先生の唇が、胸の柔らかな肌に触れた。

ちゅ、と吸い付くような音がして、私はまたビクリと体を震わせた。

「…………んっ、あ……………そこは、だめ……………って……………」



口では拒否しながら、私はさらに強く先生の頭を抱きしめていた。もっと。もっと味わって。私のすべてを。

お湯の温度よりも、私たちの体の熱の方が、ずっと高くなっていた。月明かりの下、湯気の中で絡み合う二つの影。水音と、甘い喘ぎ声だけが、夜の露天風呂に響き渡っていた。

「……はあ、んっ……もう、のぼせちゃう……」

どれくらい時間が経っただろう。

全身の力が抜けて、意識が遠のきそうになる。

さすがに、これ以上お湯に浸かっているのは危険だ。

「……先生、そろそろ、上がりましょう……？」



私が声をかけると、先生は名残惜しそうに顔を上げた。
その瞳は、情欲でとろんと濁っていて、見ているゾクゾクした。

「……そうだね。続きは、部屋でしようか」

「……っ！」

その言葉に、私の体はまた熱くなった。

これ以上の「続き」があるというの？

ふらつく足取りでお湯から上がると、冷たい夜風が火照った肌に心地よかった。

けれど、体の芯に灯った熱い炎は、消えるどころか、ますます勢いを増しているようだった。

バスタオルを体に巻き付けながら、私は先生の背中を見つめる。

(……覚悟しなさいよ。今夜は、絶対に寝かせないんだから……)

私は心の中で、精一杯の強がりを呟いた。

これから訪れる、さらに甘く、激しい夜の予感に、身震いしながら。

第三章…甘美なる奉仕と、誇り高き双丘の誘惑

ふかふかの布団。

薄暗い行灯（あんどん）の明かり。

そして、目の前に横たわる先生。

完璧なシチュエーションだ。

温泉での「ハプニング」は、あくまで序章に過ぎない。

ここからが本番。ハードボイルドな大人の夜は、ベッドルームでこそ真価を發揮するのだから。

「……ふふっ。観念なさい」



私は濡れた髪をかき上げながら、仰向けになった先生の体の上に跨った。

浴衣の裾が割れて、白い太ももが露わになる。

わざと見せつけるように、ゆっくりと腰を落としていく。

「今日は私が、徹底的に愛してあげるわ。……便利屋の社長として、サービス精神も一流だってこと、その身に刻み込んであげる」

強気な言葉とは裏腹に、私の心臓は破裂寸前だった。

だって、これからすること。

それは、大人の……そう、アレよ。知識としては知っている。漫画や小説で予習もバツチりだ。

でも、実践は……初めて、なわけて。

先生の熱い視線が、はだけた浴衣の隙間から覗く私の胸元に注がれている。その視線だけで、身体の奥が疼く。



「……まずは、ここからね」

私は震える指先で、先生の浴衣の帯を解いた。

露わになった、先生の昂ぶり。

……大きい。

温泉で見た時よりも、さらに一回り大きくなって、脈打っているように見える。
これを、私が……？

「……ごくり」

喉が鳴った。

怯むな、陸八魔アル。お前はゲヘナの巨悪（予定）だ。これくらいのモノ、手懐けて見せなくてどうするの！

「……い、いただくわよ」



私は四つん這いになり、顔を近づけた。
熱気が頬を打つ。男の人の匂いが濃くなる。
ゆっくりと唇を開き、その熱い先端に、口づけを落とした。

「んっ……」

ちゅ、という水音が静かな部屋に響く。
熱い。唇に触れただけで、火傷しそうなほどの熱量。
私は意を決して、舌先を這わせた。

「……れる……っ」

下から上へ。裏筋をなぞるように。
先生の体がビクッと反応するのが伝わってくる。
それが嬉しくて、私は少し大胆になった。
先端の割れ目を、舌先でくすぐるように転がす。



「……………ん、あ……………どう……………？ 気持ち、いい……………？」

上目遣いで先生の顔を覗き込む。

先生は苦しげに眉を寄せ、私の頭に手を添えていた。

「……………アル、すごい……………上手だよ……………」

上手。その言葉が、私のやる気スイッチを完全にONにした。

そうでしょう、そうでしょうとも！

私は口を大きく開けると、その太い楔（くさび）を、深々と啜え込んだ。

「んむっ……………！ んぐっ、ちゅう……………っ！」

口の中がいつぱいになる。
顎が外れそうなくらい大きい。



喉の奥を突かれるような圧迫感に、目尻に涙が浮かぶ。でも、苦しいのと同時に、先生と繋がっているという背徳的な快感が勝る。

「んっ、ふ……じゅる、ちゅぶ……っ、んぐっ……！」

頬を吸いすばめ、舌を絡ませ、喉を鳴らして吸い上げる。

私の口の中で、先生のモノがさらに硬く、大きく脈打つのが分かる。

頭を前後に動かすたびに、濡れた音が部屋中に響き渡る。

恥ずかしい音。いやらしい音。

でも、それが今は最高のBGMだ。

(……もっど、もっど奥まで……！)

先生の吐息が荒くなる。

腰が浮き上がり、私の口を求めてくる。

私はそれに応えるように、さらに激しく頭を振った。



唾液で口元が汚れようが構わない。

今の私は、先生を快楽の底へ突き落とす悪女なのだから。

「…………ふはっ！」

一度、口を離す。

銀色の糸が、私と先生の間を繋いで伸び、切れた。

荒い息をつきながら、私はニヤリと笑ってみせる。

「…………ふふ、凄かったでしょ？ でも、まだ終わりじゃないわ」

私は浴衣の上半身を完全に脱ぎ捨てた。

ぼよん、と豊かな双丘が弾み、露わになる。

薄暗い明かりの中でも白く輝く、圧倒的なポリューム。

私の最強の武器。



「……今度は、これで天国へ連れて行ってあげる」

私は先生のモノを、その深い谷間へと導いた。

柔らかい肉と肉の間。

そこに、硬く熱い棒が沈み込んでいく。

「……んっ、しょ……」

両手で胸を左右から寄せ、ぎゅっと挟み込む。

圧倒的な質量が、先生の昂ぶりを包み込み、飲み込んでいく。
姿が見えなくなるほど深く、柔らかく。

「……あ、これ……すごい……」

私自身も、胸の内側の肌で、先生の形を感じていた。

血管の浮き出た感触、硬さ、熱さ。



それが擦れるたびに、胸の奥がじんじんと痺れる。

「……ほら、見て……先生の、私の胸に……食べられちゃってるわよ……」

視覚的な刺激も与えるべく、私は上体を起こして見せつけた。
白い胸の波間に、時折見え隠れする赤黒い楔。

擦り合わせるたびに、ぬちゅ、くちゅ、と卑猥な音が鳴る。

唾液と、先走り汁と、私の肌から滲み出る汗が混ざり合い、最高の潤滑油になっていた。

「……きもち、いい……？　ねえ……言つて……」

腰を振り、胸を押し付け、乳首で先端を擦り上げる。

敏感な乳頭が硬いモノに触れるたび、私自身の腰もビクビクと跳ねる。

これは、攻撃でありながら、私自身への責め苦でもあった。

「くっ、アル……！　それは、効く……！」



「ふふっ、そう……！ もっと、もっと締め付けてあげる……っ！」

私は夢中で胸を寄せた。

先生の理性が崩壊寸前なのが分かる。

呼吸が荒くなり、筋肉が強張る。

来る。

先生の限界が、もうすぐそこまで来ている。

「……先生、出して……！ 私のここに……全部……！」

私は顔を近づけ、先生の耳元で甘く囁いた。

それは決定打だった。

先生の腰が大きく跳ねる。

「アルっ……！！ 出る……！！」

「……っ！ んーっ！！」



私は目を閉じ、ありつたけの力で胸を寄せ、同時に唇をその先端へと近づけた。飛び出してくる熱い飛沫。

それを一滴たりとも逃したくなかった。

ドクン、と大きな脈動と共に、白濁した熱い液体が噴き出す。私の顔に、胸に、そして口の中に。

「んぐっ……！！んっ、んむ……っ！」

熱い。

想像を絶する熱さと量。

喉に絡みつくような濃厚な味。

普通の女の子なら吐き出してしまいかもしれない。

でも、私は違う。

これは先生の命の欠片。先生の情熱そのもの。



便利屋のボスとして、依頼人（先生）の全てを受け止めるのが流儀……！

「……ごくん」

喉を鳴らして、飲み込んだ。

一度では飲み込めず、二度、三度と喉を上下させる。

食道を通って胃の中に落ちていく熱の塊。

身体の内側から、カッと熱くなるのを感じた。

「……ふはあ……っ」

全てを飲み干し、私は口元を手の甲で拭った。

目尻には生理的な涙が浮かび、頬は紅潮し、胸は白濁液で汚れて光っている。

きつと今の私は、世界で一番だらしなくて……そして、最高に魅力的なはずだ。

「……ふふ。……ごちそうさまでした」



とろんとした瞳で先生を見つめ、にっこりと微笑む。

先生は呆然としたまま、でも愛おしそうに私の頬を撫でてくれた。

「……アル、きみって子は……」

「……何よ。……美味しかったわよ？ 先生の、味」

精一杯の強がり。

でも、心臓はまだバクバクと鳴り止まない。

先生のものが収まりを見せても、私の身体の火照りは冷めるどころか、ますます熱を帯びていくようだった。

「……ねえ、先生」

私は汚れた胸を、再び先生の胸板に押し付けた。

肌と肌が吸い付く。



「……まだ、これからが本番でしょう……？」

耳元で囁き、私は先生の首筋に甘噛みした。

ご奉仕は終わり。

次は、私が愛される番だ。

夜は、まだ長いのだから。

第四章…ハードボイルドな夜、白濁のカリスマ

呼吸が整わない。

さっきまでの「ご奉仕」で、口の中も、胸の間も、先生の匂いと味でいっぱいになっている。

けれど、こんなもので満足する私ではない。

むしろ、あれはただの準備運動。食前酒（アペリティブ）のようなもの。

先生が私を仰向けに寝かせ、ゆっくりと私の足を開かせる。



旅館の行灯に照らされた私の太ももは、我ながら白くて肉付きが良い。
その間に、先生が割り込んでくる。

「……ふふ。ようやく、その気になった？」

私は乱れた髪を払いながら、挑発的な笑みを向けた。

心臓が肋骨を蹴破りそうなほど跳ねているのを悟られないように。

「待っていたわよ。……私の本当の『中』を、支配できるものならしてみなさい」

強がりだ。完全に強がりだ。

本当は、期待と少しの恐怖で体が震えている。

さっき口と胸で味わった、あの凶暴なサイズ。あれが、私の身体の奥底に入ってくるな
んて。

私の秘所は、すでに待ちきれずに濡れそぼり、愛液がシートにシミを作っていた。

先生の手が、秘裂に触れる。
ぬるり、と指が滑り込み、中を掻き回す。

「んあっ……！！ んっ……！！」

指一本でこの刺激だ。本番なんてどうなってしまうの。
先生のモノが、入り口に宛がわれる。
熱い。硬い。存在感が桁違いだ。

「……き、来て……先生っ……！！」

余裕ぶった台詞なんて、もう出てこない。
私が欲しがった瞬間、先生が腰を沈めた。

「あ、ぐ……っ！？ ん、んっ！！！」



裂けるような感覚と、埋め尽くされる充足感が同時に襲ってくる。

きつきつの肉壁を押し広げ、最奥の袋小路まで、先生が侵入してくる。

深い。深すぎる。

お腹の底から突き上げられるような感覚に、私はシーツをぎゅっと握りしめた。

「はあ、あ……っ！ 入っ……た……全部、入っちゃっ……たあ……」

自分でも信じられないほど甘い声が出る。

繋がっている。

便利屋の社長として、常に誰かを導く立場にいる私が、今は先生に完全に主導権を握られ、貫かれていく。

その事実が、たまらなく興奮を煽る。

先生が動き出した。

ゆっくりと引き抜き、また深々と打ち付ける。



「あ、んっ！ あっ、んあ……っ！」

打ち付けられるたびに、私の大きな胸がぼよんぼよんと激しく揺れる。

視界の端で、自分の胸が波打つのが見える。

恥ずかしい。こんな揺れて、だらしがない。

でも、先生はその揺れる胸も、恍惚とした表情も、すべてを愛おしそうに見つめている。

「アル、中……すごい吸い付きだ。熱いよ」

「そ、そんなこと……っ！ 言わ、ないで……っ！ ひあっ！」

腰の動きが激しくなる。

グチュ、グチュ、と水音が部屋に響き渡る。

恥ずかしい音。私の中がこんなに濡れて、先生を求めている音。

「あっ、あっ、あっ、先生っ！ そこ、だめっ、深いっ……！」



奥の、一番感じるところ。

そこを執拗に擦り上げられる。

頭が真っ白になる。

ハードボイルド？ アウトロー？ そんなの今はどうでもいい。

私はただの、先生に愛される一人の女の子だ。

「んああっ！ すごいっ、先生の、すごいっ！ 壊れるうっ！」

ガクガクと腰が跳ねる。

先生の腰に足を絡ませ、もっと深く、もっと強く求めてしまう。

背中を反らせると、大きな胸が突き出され、その先端が擦れてさらに快感が増す。

「いくっ、先生、いっちゃう！ 私、おかしくなるううっ！」

絶頂の波が押し寄せる。

視界がチカチカと明滅し、私は先生にしがみついたまま、大きく体をのけぞらせた。

中が収縮し、先生を締め付ける。

「あああーっ！っ！！！」

一度目の絶頂。

目の前が真っ白になり、全身の力が抜けていく。

けれど、先生は止まらない。

むしろ、私の締め付けに刺激されたのか、さらに激しく腰を打ち付けてくる。

「ま、まって……先生、私、もう……ひああああ!？」

敏感になりきったところに、容赦ないピストン。

これは拷問だ。最高に甘くて、とろけそうな拷問。

何度も何度も、小さな絶頂が波のように押し寄せてくる。

涎が口の端から垂れても、もう拭う余裕すらない。



「アル、僕も……そろそろ限界だ」

先生の息遣いが荒くなる。

その言葉を聞いて、私の朦朧とした意識の中に、ふと「悪女」としての矜持が蘇った。最後は、私らしく。

先生のすべてを、私を受け止めて終わらせるのよ。

「……先生、抜いて」

「えっ？」

「抜いて……最後は、私のここに出して……っ」

私は自分の豊かな胸を両手で持ち上げ、強調してみせた。

そう、この自慢の胸で、先生の最後の一滴まで搾り取ってあげる。

そして、その証を、私の顔に刻み込んでほしい。

先生は私の意図を汲み取り、名残惜しそうに中から引き抜いた。



「ぼんっ」という音がして、蜜に塗れた剛直が姿を現す。
私は起き上がり、その熱い塊を、再び胸の谷間に挟み込んだ。

「……ほら、早く……っ！ 私を汚して……っ！」

先ほどのご奉仕とは違う。

これは仕上げだ。

胸で挟み、腰を振って擦り上げながら、私は上目遣いで先生を見つめる。
先生の限界は近い。竿がビクビクと脈打っている。

「……顔に……かけて……先生の全部、私にかけてえっ！」

その言葉が引き金だった。

「っ……アル、いくよっ！」
「んっ、来てっ！！！」



私は胸の力を緩めず、逆に思い切り谷間を閉じた。
同時に、顔を近づけ、目を見開いてその瞬間を待つ。

ドクンッ！

勢いよく放たれた白濁した飛沫が、放物線を描いて私に降り注ぐ。
熱い液体が、頬を叩き、唇を濡らし、睫毛に絡みつき、髪へと滴る。

「んんっ……！！」

一度では終わらない。

二度、三度と、大量の愛の証が、私の顔面を白く染め上げていく。
胸の谷間にも、顔から滴り落ちた白濁液が溜まり、ぬらぬらと光っている。
視界が白く濁る。

生臭くて、でも大好きな匂いが、鼻腔を満たす。



すべての放出が終わり、先生が荒い息をついている。
私はゆっくりと目を開けた。

片方の目は、白い液体で張り付いてうまく開かない。
けれど、私は勝利の笑みを浮かべた。

「……はあ、はあ……ふふっ」

舌先を伸ばし、唇についた雫を舐め取る。

「……見た？ 先生。これが、私の実力よ……」

顔を精液まみれにして、胸もドロドロで、髪も乱れきっている。
客観的に見れば、きつと酷いありさまだろう。

でも、今の私は、どんな宝石を身につけるよりも輝いているはずだ。
だって、これは先生が私だけを愛してくれた証拠なのだから。



「……アル、すごいよ。最高だった」

先生が優しく私の頬の汚れを指で拭ってくれる。

その優しさに、張り詰めていた気が緩み、急に恥ずかしさがこみ上げてきた。

「……も、もう。……そんなに見ないでよ……。バカ……」

私は顔を真っ赤にして、精液まみれの顔を先生の胸に埋めた。

あーあ、せつかくのキメ顔も台無しだ。

でも、先生の心臓の音がトクトクと聞こえてきて、それが何よりも心地よかった。

夜は更けていく。

でも、私たちの熱はまだ冷めそうになかった。

温泉旅行の夜は、まだまだ終わらないのだから。



第五章・夜明けまで、愛しきホンコツ・ハードボイルド

一度果てたはずなのに。

私の体は、なぜこんなにも食欲なのだろう。

顔にかかった白濁をタオルで拭われ、少し落ち着いたかと思っただのも束の間。

先生の熱っぽい瞳と目が合った瞬間、私の体の奥底で燻っていた火種が、再び爆発的に燃え上がったのだ。

「……………うそ。まだ、できるの……………」

驚きと、それ以上の期待を込めて問いかけると、先生は無言で私の唇を塞いだ。

濃厚なキス。

舌が絡み合い、唾液を交換する。

さっきまでの行為で敏感になりきった神経が、唇の触れ合いだけでビリビリと電気信号を走らせる。



「んっ……んんう……ぶはっ……」

唇が離れると、銀色の糸が引いた。

私はもう、抵抗する気なんてさらさらなかった。

むしろ、もっと欲しい。

さっきは顔で受け止めたけれど、今度は……もっと深いところで、先生を感じたい。

「……先生。……次は、ちゃんと『中』で愛して」

潤んだ瞳で懇願する。

悪のカリスマにあるまじき、甘えきった声。

でも、これが今の私の偽らざる本音。

私のすべてを先生色に染め上げてほしい。

先生が私の両足を大きく広げ、腰を割り込ませる。

さっきよりも濡れて、柔らかく解された秘所が、待ちきれないとばかりにヒクついてい

るのが自分でも分かる。

「……来て……！」

私が腰を浮かせたのと同時に、先生が沈み込んできた。

「あ……っ！ んああああ……っ！」

二度目の挿入は、一度目とは違う感覚だった。

痛みはもう微塵もない。

あるのは、脳髓を溶かすような圧倒的な快感と、隙間なく埋め尽くされる充足感だけ。
ヌブ、チュブ、と卑猥な水音を立てて、最奥まで一気に貫かれる。

「はあ、っ……入っ……すごい、奥まで……っ」

先生と完全に一つになった。



その事実だけで、胸がいっぱいになる。
仰向けになった私の視界には、汗に濡れた先生の顔と、天井の木目、そして揺れる自分の胸が映る。

「……アル、中は……大丈夫？」

「……馬鹿ね。……最高、よ……」

強がりと言う余裕すらないけれど、精一杯の愛を込めて答える。
先生が動き出す。

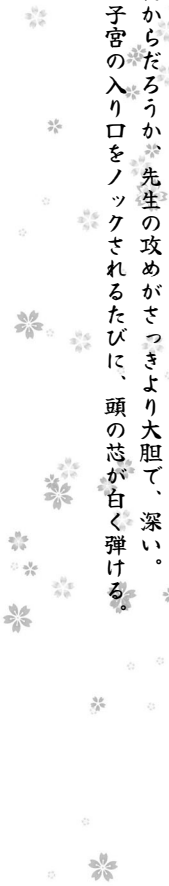
ゆっくりと、ねっとりど、私の内側の髪（ひだ）を一枚一枚愛てるように。

「んっ、あ……あっ、そこ……っ！」

敏感なスポットを的確に挟られる。

二回戦目だからだろうか。先生の攻めがさつきより大胆で、深い。

ゴリッ、と子宮の入り口をノックされるたびに、頭の芯が白く弾ける。



「ひあつ！ ふあ、ああつ！ 先生、激しっ……！」

私の大きな胸が、激しいピストンに合わせて波打つ。

バシン、バシンと肌がぶつかり合う音と、クチュクチュという水音が混ざり合い、淫靡な協奏曲を奏でている。

汗ばんだ肌同士が滑り、体温が急上昇していく。

「……ねえ、先生……もっと、顔……見せて……」

私は先生の首に腕を回し、顔を引き寄せた。

至近距離で見つめ合う。

普段は涼しい顔をしている先生が、今は私への情欲で顔を歪めている。その表情が、たまらなく愛おしい。

「……好き……大好き……」



口づけの合間に、本音がこぼれ落ちる。

ハードボイルド？ 知ったことじゃないわ。

今はただ、この愛する人に抱かれている幸福に溺れていたい。

「んんっ！ あっ、あっ、深いっ！ そこイイっ！」

先生の腰の動きが早まる。

ラストスパートだ。

私の内壁も、先生を逃がさないようにギユウギユウと締め付ける。
お互いのリミッターが外れていく。

「アル、もう……限界だ……中で、いいか……？」

先生の切羽詰まった声。

断る理由なんて、どこにもない。



むしろ、それを待っていたのだから。

「……いいわよ……全部、ちょうだい……！」

「先生の熱いの……私のお腹の中に、全部ぶちまけて……っ！！」

私は両足で先生の腰をがっちりとホールドし、背中を反らせて受け入れの体勢を取った。子宮口を開いて、先生の全てを飲み込む準備をする。

「いくっ……！」

「あっ、私もっ……先生、いくうううっ！！」

ドクンッ！！

先生の体が大きく跳ね、最奥で熱い奔流が解き放たれる。

同時に、私も絶頂に達した。

中が痙攣し、先生のを強く締め上げながら、熱い種を搾り取る。



「ああああ……っ！ 熱いつ、入ってきてるう……っ！」

お腹の奥が、カッと熱くなる。

ドクドクと脈打ったたびに、大量の愛が注ぎ込まれていく感覚。私の体の中が、先生で満たされていく。

それは、どんな言葉よりも確かな「所有」の証だった。

「……はあ、ああ……っ、んん……」

長い、長い絶頂の余韻。

私たちは絡み合ったまま、荒い息を繰り返した。

先生の重みが心地いい。

内側から溢れ出た白濁が、結合部からトロリと伝い落ち、シーツを汚していく。

しばらくして、先生がゆっくりと体を離れた。



ボン、と抜ける音と共に、大量の白濁が溢れ出る。

「……あ……こんなに……」

その光景を見て、また顔が熱くなる。

だらしな性格好。汚れたシート。

でも、不思議と嫌悪感はなかった。

むしろ、誇らしいとさえ思う。

先生が横に倒れ込み、私を優しく抱き寄せた。

汗で張り付いた髪を撫でてくれる手が優しい。

「……気持ちよかった？」

先生が耳元で囁く。

私は先生の胸板に顔を埋め、こくりと頷いた。



「……悔しいけど。……最高だったわ」

「……先生は？」

「僕もだよ。アルが最高すぎて、止まらなくなっちゃった」

その言葉に、胸の奥がじんわりと温かくなる。

私は顔を上げて、先生を見つめた。

「……ふふっ。当然よ。私は完璧な社長なんだから、夜の相手としても完璧に決まっているじゃない」

いつもの調子で強がってみせる。

でも、その直後に、ふにやりと相手を崩してしまった。

「……でも、本当は……先生がリードしてくれたおかげよ。……ありがとう」



素直な感謝。

それが、私の精一杯のテレだった。

先生は微笑んで、私のおでこにキスをした。

「……もう、動けない……」

全身の力が抜けて、まぶたが重い。

温泉の心地よい疲労感と、情事の後の脱力感。

そして何より、先生の腕の中という安心感が、私を深い眠りへと誘っていた。

「……先生」

「ん？」

「……また、連れてきてね。……二人きりで」

消え入りそうな声でねだると、先生は力強く抱き締め返してくれた。



「もちろん。約束するよ」

その言葉を聞いて、私は満足げに目を閉じた。

ハードボイルドなアウトローの休日、こうして甘く、幸せなまどろみの中で幕を閉じた。

明日の朝、目が覚めたら、きつと私はまた「完璧な悪の社長」を演じようと必死になるだろう。

浴衣がはだけていたり、寝癖がひどかったりして、また先生に笑われるかもしれない。でも、今はいい。

今夜だけは、先生だけのボンコツで可愛い「アル」のまま、夢を見させて――。

エピソード…残業時間は、社長室で秘密の情事を

あの夢のような温泉旅行から、数日が経った。

ゲヘナの自治区にある、私たち便利屋の事務所。



普段なら賑やかなこの場所も、今は静寂に包まれている。

時刻は深夜。

私は一人、社長デスクで書類の山と格闘……しているフリをして、物思いに耽っていた。

「……はあ。ダメね、集中できない」

ペンを置き、天井を見上げる。

脳裏に蘇るのは、湯煙の向こうの景色と、熱い肌の感触。そして、先生の優しい笑顔。

あの一夜で、私は変わってしまったのかもしれない。

ハードボイルドなアウトローとして、一度むけた……というより、単に先生への依存度が高まっただけのような気もするけれど。

コンコン、と控えめなノックの音が響く。

こんな時間に？ まさか借金取り！？

身構えてドアを覗みつけると、そこに立っていたのは、私の思考を占領していた張本人

だった。

「……先生？」

驚いて立ち上がると、先生は「差し入れを持ってきたよ」と、コンビニの袋を提げて微笑んでいた。

その笑顔を見た瞬間、張り詰めていた社長としての顔が、雪崩を打って崩れそうになる。いけない、威厳を保たなきゃ。

「……こんな夜更けに、何の用かしら。便利屋の社長は多忙なのよ？」

サングラスの位置を直し、精一杯の強がり言う。

けれど、先生は私のデスクの横まで歩み寄ると、私の頬を指先でツンとつついた。

「嘘だね。寂しそうな顔してたよ、アル」

「なっ……!!? し、してないわよ! 私は常にクールで……!」

言い訳をしようとした私の唇を、先生の唇が塞いだ。

一瞬の口づけ。

それだけで、事務所の空気が一変する。

書類のインクの匂いと、埃っぽい事務所の空気が、急に甘ったるいものに変わった気がした。

「……ずるい」

「アルに会いたかったんだ」

そんな直球な言葉、反則だ。

私は観念して、溜息をついた。

どうやら今夜も、ハードボイルドへの道は遠回りになりそうだ。

でも、それが嫌じゃない自分がある。

「……仕方ないわね。特別に、社長室での休憩を許可してあげる」



私は立ち上がり、ブラインドを下ろすと、鍵をかけた。
密室。

深夜のオフィスで二人きり。

その背徳的なシチュエーションが、温泉とはまた違う興奮を呼び覚ます。

私は先生の前に立つと、着ていたコートを脱ぎ捨てた。

下は、いつものシャツとタイトスカート。

きつちりとボタンを閉めたシャツの胸元は、私の豊かな双丘によって悲鳴を上げている。

「……温泉でのこと、忘れられないの？」

挑発的に問いかげながら、私はゆっくりとシャツのボタンを外していった。

一つ、二つ。

襟元が開き、白い鎖骨が露わになる。

三つ、四つ。



黒いレースのブラジャーに包まれた、圧倒的な谷間が解放される。

「……見て。先生が好きなこれ、事務所で見ると……また違った興奮があるんじゃない？」

私はブラジャーのホックも外し、シャツの前を大きく広げた。

ボロン、と重みのある音を立てて、白い果実が弾け出る。

オフィスの蛍光灯に照らされたそれは、温泉の時よりも生々しく、艶かしく輝いていた。

「……すごい。アル、綺麗だ」

先生の視線が釘付けになる。

その熱視線を感じながら、私は先生のベルトに手を掛けた。

「……ここじゃ、声を出したら近所迷惑になるわよ？ ……我慢できる？」

カチャリとバックルを外し、ファスナーを下ろす。

中から飛び出してきたのは、すっかりお馴染みになった、熱く脈打つ剛直。私はデスクに浅く腰掛けると、先生を引き寄せ、その熱いモノを胸の谷間に宛がった。

「……んっ、しょ……」

両手で胸を寄せ、肉の壁を作る。

そこに、先生のモノを埋め込んでいく。

柔らかい脂肪が形を変え、硬い棒を包み込む。

「……ほら、どう？ 私の胸、柔らかいでしょう？」

腰を振り、胸で擦り上げる。

先端が敏感な乳首を掠めるたびに、私自身の背筋もゾクゾクと震える。

シャツの袖は通したまま、前だけがはだけた姿。

仕事中を装ったままの痴態。

それが、どうしようもなくエロティックだ。



「アル、そこ……すごい圧迫感だ」

「ふふっ、そうでしょ……？ 社長の包容力、甘く見ないで……っ」

クチュ、クチュ、と湿った音が静かな事務所に響く。

ローションなんていらぬ。

先生から滲み出る我慢汁と、私の肌の汗だけで、十分すぎるほど滑る。

「……んっ、あ……！ 先生の、硬い……血管、浮いてるのわかる……」

視線を落とすと、白い胸の肉に埋もれて、先生のモノが見え隠れしている。

出し入れするたびに、胸の肉が波のように揺れ、先端が私の顎の下あたりまで迫ってくる。

その視覚的な暴力に、私の方が参ってしまいそうだ。

「……ねえ、気持ちいい……？ もっと、強くしてほしい……？」



上目遣いで尋ねながら、私はさらに強く胸を寄せた。
乳房の肉が密着し、逃げ場をなくす。

「くっ、アル……！　いいよ、すごい……！」
「……っ！　なら、もつと……！」

私は首に腕を回し、胸だけでなく、舌も使って攻め立てた。
飛び出してくる先端を舐め、また胸の奥へと沈める。

先生の呼吸が荒くなる。
限界が近い。

「……出して。ここに……私の自慢の胸に、全部……！」

私が嘔いた瞬間、先生の腰が大きく跳ねた。



「っ、出る…………！」

「んっ…………！！」

ドクンッ！ と熱い衝撃。

白濁した液体が、勢いよく噴き出し、私の鎖骨から胸の谷間にかけて降り注ぐ。
熱い。

オフィスの冷房なんて意味がないくらい、熱い愛の証。

「…………はあ、ん…………すご……………いっぱい……………」

胸の間から溢れ、お腹の方まで垂れていく白濁。

私はそれを指ですくい、べろりと舐めた。

鉄の味と、先生の味。

でも、これで終わりにするつもりなんてない。

むしろ、スイッチが入ってしまった。



胸を汚されたただじゃ足りない。
もつと深いところで、繋がりを確かめたい。

「……先生。……まだ、元気なんでしょう？」

私はデスクの上にある書類を、バサバサと床に払い落とした。
重要な契約書かもしれないけれど、今はどうでもいい。
広くなったデスクの上に、私は仰向けに寝転がった。

「……続き、しましよう」

スカートの裾を捲り上げる。

黒のストッキングに包まれた足を開き、その奥にある秘所を露わにする。

下着は、とつくにずらしてある。

愛液で濡れて、妖しく光る花卉。



「……社長命令よ。……私の中を、満たしなさい」

先生が私の足の間に割り込む。

まだ硬さを失っていないモノが、濡れた入り口に押し当てられる。

「……いくよ、アル」

「……ん、来て……っ！」

ズブンッ、と重たい音を立てて、一気に挿入された。

「あぁっ！ んぐっ……！ 入っ……たぁ……！」

事務所のデスクの上。

硬い天板が背中に食い込む感触と、内側から突き上げられる柔らかい快感。

そのギャップに、頭がおかしくなりそうだ。



「はっ、あっ！ 先生っ、そこっ、深いっ……！」

先生が私の足を肩に担ぎ、深く、激しく腰を打ち付ける。
角度がつくと、子宮の入り口を直接叩かれているような感覚になる。
脳髓が揺れる。

「あひっ！ んああっ！ だめっ、声、出ちやうっ……！」

近所迷惑なんて気にしてられない。

快感に任せて、私は獣のように喘いだ。

机がガタガタと音を立てて揺れる。

そのリズムに合わせて、私の体も揺さぶられる。

「アル、中……すごい締め付けだ……」

「だ、だって……先生が……気持ちよすぎて……っ！ んああっ！」



シャツははだけ、胸は精液まみれて揺れ、スカートは捲れ上がり、ストッキングは伝線しているかもしれない。

今の私は、誰がどう見ても「悪のカリスマ」なんかじゃない。
ただの、快楽に溺れた雌だ。
でも、それが最高に幸せて、誇らしい。

「……先生、好き………！ 大好き………！」

感情が溢れ出す。

体も、心も、限界を超えていく。

「あつ、あつ、いくつ！ また、いつちやうううーっ！」

強烈な突き上げと共に、絶頂が訪れる。

目の前が真っ白になり、私は先生の背中に爪を立てた。



「くっ、僕も……!!」

先生も同時に限界を迎える。
最奥で膨張し、熱い奔流が解き放たれる感覚。

「ああああ……っ！ 熱いつ、ドクドクしてるう……っ！」

中に出されている。

たっぷりと、深く、確実に。

お腹の中が先生で満たされていく充足感に、私は涙がこぼれそうになった。

「……はあ、はあ……んん……っ」

長い余韻。

ピクピクと痙攣する内壁が、最後の一滴まで絞り取ろうとしている。
先生が覆いかぶさり、私の首筋にキスをした。



「……はあ。……めちやくちやね」

呼吸が整うのを待って、私は天井を見つめながら呟いた。

散らばった書類。汚れたデスク。乱れきった衣服。

明日の朝、ハルカが出勤してきたら卒倒するかもしれない。

でも、先生の腕の中にいる今、そんな心配事は些細なことのように思えた。

「……責任、取ってよね？」

私は先生の胸に顔を埋め、上目遣いで睨んでみせた。

もちろん、本気で怒っているわけじゃない。

これは、これからはずっと私と一緒にいてほしいという、不器用なプロポーズのようなものだ。



「ああ。一生かけて、返すよ」

先生の言葉に、私は今日一番の笑顔で応えた。

「……ふふつ。覚悟しておきなさい。私の野望は、世界征服なんだから……。そのパートナーを務めるなら、これくらいじゃ足りないわよ？」

そう言っつて、私はまだ繋がったままの腰を、くねりと動かした。

先生が息を呑む心配がする。

夜は、まだ始まったばかりだ。

ゲヘナの夜明けまで、私たちの秘密の残業時間は終わらない――。

く完く

